知識を再編集する：J. H. ロビンソンの「知識の人間化」と草創期サイモン・アンド・シュスター社をつなぐもの

尾　﨑　永　奈

はじめに

1920 年、H. G. ウェルズ (H. G. Wells) による人類誕生前から 20 世紀までの文明史をまとめた歴史書 *The Outline of History* がアメリカで発売されると、たちまちベストセラーとなった。当時すでにアメリカでも名の知られた作家の著作とはいえ、1300 ページの重厚な歴史書がベストセラーになることは異例であった。学術的なノンフィクションが売れるということに気付きはじめた出版界の人々は、歴史・哲学・化学などの学術的な知識を各界の専門家が一冊にまとめた概説書を出版するようになった。1920 年代に次々と出版された概説書に共通していたのは、学術的なテーマを包括的に扱いながらも、対象読者をその分野の専門家や研究者ではなく、専門的な知識を持たない「顔の見えない『世間一般の読者』」としていた点であった[1]。タイトルに “The Outline of,”“The Story of” などと冠し、学問的な事柄について、専門用語をなるべく避け平易な表現で解説したそれらの書籍の多くは、ウェルズの著書と同様に好調な売れ行きをみせ、1920 年代アメリカの出版界における一つの現象を形作った。

新旧さまざまな出版社が、学術的なトピックを扱った一般読者向けの概説書を刊行した。創業間もない新進気鋭の出版社であったサイモン・アンド・シュスター社 (Simon and Schuster, Inc., 以下 S&S 社と記す) もその一つである。同社は 1924 年に、ピアノのセールスマンであったリチャード・

Studies in English and American Literature, No. 51, March 2016
©2016 by the Engish Literary Society of Japan Women's University

レオ・サイモン（Richard Leo Simon）と自動車雑誌の編集者をしていたマックス・リンカーン・シュスター（Max Lincoln Schuster）が興した出版社である。創業当時流行しつつあったクロスワード・パズルをいちはやく出版事業にとりいれ、鉛筆付のパズル・ブックを販売することで売り上げを伸ばした。また、同社から出版されたウィル・ダラント（Will Durant）の哲学書 *The Story of Philosophy*（1926）の人気を受け、哲学史、美術史、音楽史などに関する概説書のシリーズ化も試みた。このとき同社の概説書の出版・広告活動のキーフレーズとなっていたのが「知識の人間化」（humanizing of knowledge）という概念である。この概念は、アメリカの歴史学者ジェームズ・ハーヴェイ・ロビンソン（James Harvey Robinson）が同名の著書 *The Humanizing of Knowledge*（1923）のなかで提唱したものである。前述のダラントの著作の広告では、文芸評論家らによる書評のなかから「人間化」（humanize）という語を含む箇所を意図的に抜粋し、同書の魅力として強調している。また 1928 年には論壇誌 *Forum* との共同企画として「知識の人間化」をテーマにノンフィクションの原稿を対象とした賞金 7500 ドルの文学コンテストを開催した。さらにシュスターの日記や編集メモなどの社内文書は「知識の人間化」というフレーズに度々言及しており、S&S 社がこの概念を出版事業の重要なコンセプトとして強く意識していたことを示している。

1920 年代の概説書出版については、アメリカの出版産業史[2]、文化史[3]、教育史[4] など複数の領域の研究において言及されている。1920 年代の概説書出版が出版史のみならず文化史や教育史の観点からも捉えられてきたという事実は、この時代に生まれた概説書とそれをとりまく社会とのあいだに、単なる一過性の商業的な「ブーム」でくくることのできない関係性があったことを示唆している。とはいえ、1920 年代の文化の一側面としてこの現象に言及する研究は少なからず存在するものの、この出版傾向が持っていた思想史的な意味を明らかにしようとした研究はほとんどみられない。そこで本稿では、1920 年代の出版文化を思想史のなかに位置付ける試みの

一つとして、S&S 社が自社の概説書の広告や販売促進活動において度々用いていた「知識の人間化」の概念に着目し、ロビンソンの思想と同社の出版活動とが、専門化・複雑化した既存の知識を非専門家向けに再編集するという「編集」のアナロジーによって結びついていることを明らかにする。

1.　ジェームズ・ハーヴェイ・ロビンソンと「知識の人間化」

ジェームズ・ハーヴェイ・ロビンソンはヨーロッパ思想史の研究者であり、ハーヴァード大学で修士号、ドイツ・フライブルク大学で博士号を取得後、ペンシルヴェニア大学とコロンビア大学でヨーロッパ史の授業を担当した。大学で教鞭をとる傍ら、チャールズ・A・ビアード（Charles A. Beard）らとともに大学生向けの教科書の執筆にも意欲的に取り組んだほか、現在のニュースクール大学（The New School）の設立者の一人としても知られる。

ロビンソンが「知識の人間化」を提唱した著作 *The Humanizing of Knowledge* において前提となっているのは、「新歴史」（new history）という概念である。この概念には、歴史研究が政治と軍事に関する出来事の記述に囚われていることへの批判に加えて、近代歴史学の中心的存在であったレオポルド・フォン・ランケ（Leopold von Ranke）が提唱したような、徹底的な史料批判を通じて事実を「あるがままに（wie es eigentlich gewesen）」とらえようとするアプローチへの批判が込められていた。「新歴史」について論じた著書 *The New History*（1912）の冒頭で、ロビンソンはまず歴史を「過去の人間の営みについての、漠然としていて包括的な科学」と位置付ける[5]。そして歴史が科学であるためには、ある歴史的事象について記述するときにランケのように「事実がどうであったか」を精査するのではなく「それはどのように発生したのか」に着目すべきであると主張した。そしてそのようにして「科学」性を担保した歴史研究が「私たちが、自分たち自身やその仲間について、そして人類の抱える課題や展望について、理解する助けとなること」に寄与すべきものであると強調する[6]。つまりロビンソンの

提唱する「新歴史」の概念において「科学」としての歴史は、研究の発展に重要な断片的な真実を追い求める以上に、現在や未来をより良くするために活用されるべきものであり、現在の諸問題を解決し人類全体の進歩のために役立たねばならないものであった。

The Humanizing of Knowledge は、この「新歴史」の概念を下敷きにしつつ、学術的な知識を社会の進歩に還元する「知識の人間化」の必要性を論じた書である。本書の冒頭でロビンソンは科学者、詩人、宗教指導者、芸術家、哲学者といった人々を「思考を作り上げる者」(mind-makers)、「問いを投げかける者」(questioners)、「発見する者」(discoverers)、「指摘する者」(pointers-out) であると定義する[7]。ロビンソンによれば、これらの仕事に就く者はみな、多くの大衆が気づかないもの、見えないもの、感知できないものを「発見」したり「指摘」したりすることで、思想や理論を作り上げることに貢献してきた。しかし彼らの「発見」や「指摘」そのものが大多数の人々にとって感知できないものであるがゆえに、その「発見」は社会のなかで等閑に付される。その原因としてロビンソンが指摘するのは、彼らの作り上げた理論や思想についての研究が複雑化・細分化し、学問の蓄積が一部の研究者や専門家に占有されているという状況である。研究の蓄積の複雑化・細分化は学問の発展の成果には違いないが、複雑化・細分化した知識は一方で、それを使いこなせる人間を限定する。ロビンソンにとって、社会全体の進歩に有用であるべき知識の蓄積が、一部の研究者や専門家による特定の研究のみに役立っている状態は望ましいものではなかった。彼はそうした状態を知識の「非人間化」(dehumanization) と呼び、知識はできるだけ多くの人間が利用できるものへと「再人間化」(re-humanization) されるべきであると説く。

ここでロビンソンが対象としている「知識」(knowledge) は、具体的には「科学的な知識」(scientific knowledge) を指している。第一次世界大戦後のアメリカ社会では進化論教育への反対運動が拡大しており、本書が書かれるきっかけとなったのは 1922 年 6 月のアメリカ科学振興協会の会議

でロビンソンが行ったスピーチであった。このスピーチでロビンソンは拡大する反進化論運動に異議を唱え、学問の自由を訴えた[8]。このような経緯を考慮すれば、反進化論運動への批判を反映した本書でのロビンソンの主たる関心は、生物学をはじめとする自然科学にあったといえる。しかし *The New History* における「歴史は科学である」という見解や、そこで示唆されているロビンソンの「科学 (的なるもの)」への楽観的な期待を前提とするならば、*The Humanizing of Knowledge* において論じられている「科学的知識」が自然科学分野のそれに必ずしも限定されないものであるという見方ができる。さらに、科学者を詩人や哲学と同じカテゴリーに入れて論じるロビンソンの姿勢は、本書の主題である「知識」が基本的には自然科学を想定したものである一方で、その議論は人文学などの他の分野にも十分に応用可能であることを示している。

ロビンソンの「人間化」は二つの方法で達成される。一つは、科学者をはじめ上述の職に就く人々の「発見」「指摘」を理解できる知的な土壌を社会のなかに作ること、すなわち前述の一部の専門家・研究者によって独占されている知識を、専門知識を持たない人々にとっても利用可能なものにする試みである。そしてもう一つは、その「発見」がいかに普遍的で、社会的な意義があり、無関心ではいられないような重要なことがらであるかを示すことである[9]。才能ある者による「発見」を受け入れられる知的な社会と、「発見」の意義を発信する努力。この二つが両輪となって機能するための働きかけこそが、彼のいう「人間化」なのである。

この抽象的な目的を達成するにあたりロビンソンが期待するのは、専門家と非専門家とをつなぐメディアの役割である。ここでいうメディアとは、学校・大学の教員や成人教育に携わる指導者など、知識や情報を何らかの形で伝える役割を担うあらゆる存在を指している。しかしとりわけ、彼が「知識の人間化」のための媒体として想定しているのは、書籍や雑誌などのいわゆる活字媒体に携わる「新たな書き手たち」(a new class of writers) である。「人類や人類をとりまく世界についての、我々が持っている最良の知

識を広めるために」、新たな書き手たちは「知識の人間化の意識的な冒険」を引き受けるべきであるとロビンソンは主張する[10]。具体的には、専門的・学術的内容について、専門用語を極力排し、非専門家の一般読者に理解しうる書籍・記事を執筆するということである。当時出回っていた一般読者向けの学術書が依然として専門用語を多用した難解なものであると指摘したうえで、「知識の人間化」に真に貢献しうる「書き手たち」は膨大で複雑化した情報を「再分類する者」(re-assorters)、「選りわける者」(selectors)、「組み合わせる者」(combiners) として、そして専門知識を持たない読者に「啓蒙する者」(illuminators) としての特質を同時に有している必要があると述べる[11]。その際に彼らが留意すべき点は三つあり、まず読み手の注意を惹きつけること。次に、その書籍や記事のなかで示される情報が読者に伝わりやすいよう配慮せよということ。そして最後に、書籍や記事中での情報や知識が、読み手の日常生活における考え方やふるまいにいかに重要な影響を及ぼすかという点を示唆することである[12]。つまり、ロビンソンの「人間化」の担い手となるべき人々には、専門化・複雑化した既存の情報や知識を非専門家の人々に理解しやすい形で編み直すことのできる能力とともに、それらの情報がいかに個々人の生活や社会全体にとって意義のあるものであるかを啓蒙する教師としての役割も求められるのである。

「知識の人間化」という極めて抽象的な概念を主題としながらも、ロビンソンの提案は出版業界にとって示唆的であった。それは彼の「人間化」の議論が反進化論教育運動、すなわち人々の自然科学に対する態度への批判を出発点としつつも、文学や哲学など複数の分野に応用可能なものであったためである。のみならず、出版業に課せられた教育的な使命について具体的な指摘とともに論じられていたためである。

2.　S&S 社の出版活動と「知識の人間化」

S&S 社による「知識の人間化」の実践は、1926 年に同社から出版されたウィル・ダラントの *The Story of Philosophy* に端を発している。同書はソ

クラテスやプラトンといった古代ギリシアの哲人から20世紀アメリカの哲学者に至るまで、その思想と生涯・半生を一冊にまとめた書籍であり、S&S社の「『知識の人間化』の書籍シリーズの第一弾」と位置付けられている[13]。

1926年秋、創業からわずか2年のS&S社にとって、*The Story of Philosophy*は貴重な「金の卵」であった。同書は発売されるやいなやたちまちベストセラーとなり、ダラントは労働者向け小冊子の書き手の一人という存在から、哲学博士として一躍その名を知られる存在となった。同書の出版はS&S社の一つの転換点でもあった。クロスワード・パズルの流行で出版社として順調なスタートを切った同社だが、サイモンもシュスターも、パズル・ブックという「新進気鋭の出版社の商品としてはいささか非文学的で威厳に欠ける」ものをいつまでも売り続けることには満足していなかったので、この哲学書はS&S社の新たなイメージを打ち出す代表的な書籍となった[14]。

*The Story of Philosophy*は、ダラントがもともと別の媒体に寄稿していたエッセイを再編集したものである。彼はコロンビア大学で哲学の博士号を取得後、いくつかの大学や労働者向けの市民講座などで哲学を教える傍ら、カンザス州ジラード市の社会主義者エマニュエル・ホールドマン＝ジュリアス（Emanuel Haldeman-Julius）が発行する労働者向けの廉価の小冊子シリーズ「リトル・ブルー・ブックス（The Little Blue Books）」に哲学のエッセイを書いていた。このシリーズではシェイクスピアなどの古典の再版に加えて、産児制限運動家のマーガレット・サンガーや黒人活動家W. E. B. デュボイスらによる短いエッセイなどを、ステープラーで綴じただけの簡素な冊子の形で出版し、一冊5セントという低価格で通信販売していた。シュスターがこのシリーズの愛読者であったことから、ホールドマン＝ジュリアスと書簡を交わし親交を深め、ほどなくしてシュスターがホールドマン＝ジュリアスからダラントのエッセイの出版権を購入したことで*The Story of Philosophy*が誕生したのである。

S&S 社が「知識の人間化」というコンセプトを出版事業に取り込む端緒となったダラントの *The Story of Philosophy* は、同社にとってどのような位置づけにあったのか。シュスターは同書の魅力について、哲学的な概念を非常に健全なやり方で明快にしていると評価する。そのうえで、哲学の専門知識や研究の素養を持たない一般読者を惹きつけたのは、哲学の概念そのものだけでなく、それを提唱した哲学者についての伝記的な記述と「きらめくようなユーモア」という彼の文才にあったのではないかと振り返る[15]。そしてそのような一般読者を惹きつける文章は、ダラントが「大学生のみならず、労働者に向けた授業を行ってきた経験」を有しているからであると評する[16]。つまり、S&S 社の「知識の人間化」の皮切りとなった *The Story of Philosophy* はダラントの成人教育に携わった経験によって生まれたといえるのである。

1928 年に S&S 社と論壇誌 *Forum* との共催という形で創設された「知識の人間化に贈るフランシス・ベーコン賞 (Francis Bacon Award for Humanizing of Knowledge, 以下「ベーコン賞」と記す)」は、S&S 社がロビンソンの「知識の人間化」に対する関心を公にしたという点でも画期的な事例である。同賞は、一般読者向けのアカデミックなノンフィクションの未発表原稿に贈られる賞であり、受賞者には S&S 社からの原稿の単行本化と *Forum* 誌上での連載が約束され、賞金として 7500 ドル、および副賞の金メダルが授与されるというものであった。哲学者フランシス・ベーコンの名を冠してはいるものの、この賞の趣旨は *The Humanizing of Knowledge* を多分に意識したものであった。たとえば賞金の内訳や優勝者との連載の契約などについて記した 1927 年 9 月 1 日付の約款のなかで、同賞の趣旨は「ジェームズ・ハーヴェイ・ロビンソン教授の名言である『知識の人間化の意識的な冒険を続ける』ような書籍の執筆を活発なものとし、賞を授けること」と記されている[17]。また S&S 社にとっては、ダラントの哲学書に続く新たな「金の卵」を発掘するための装置でもあった。シュスターは日記のなかで、この賞について「*The Story of Philosophy* の成功に続く戦略にな

るかもしれないし、不朽の価値を持つ優れたノンフィクションの出版元として、サイモン・アンド・シュスター社に世間の注目を集める術となるかもしれない」との期待を寄せている[18]。

この賞にとって、書き手の専門・関心領域それ自体は選考に大きく影響するものではなかった。というのもこの賞が特に重視していたのは、各自の専門領域についての正確な知識のみならず「知的な非専門家の人々の関心を強く惹きつけ、その関心を維持するに足るような生き生きとした」明快さであったからである[19]。ロビンソンの「知識の人間化の意識的な冒険」に値するものであれば分野は問わず、人文学から社会科学、自然科学まで、ほぼすべての学問領域が対象となった。実際、哲学者のジョン・デューイ(John Dewey) をはじめ、天文学者、昆虫学者、考古学者、美術評論家、アメリカ自然史博物館の館長など複数の分野の専門家が選考に関わったことからも、対象の幅広さがみてとれる。しかしこの事実上分野不問とする姿勢にこそ、この賞がどのような基準で受賞作を決定しようとしていたのかが表れている。選考基準についての記述のなかにある「フィクションよりも冒険的で刺激的」で「効果的に構成され、躍動感に満ちた真実」を求める、といった抽象的な文言の数々は、この賞が歴史や哲学といった特定のジャンル自体ではなく、「どのように語るか」を重視していたことを示している[20]。

賞の創設の話が持ち上がったのは 1926 年の秋であった。シュスターは同年 10 月 22 日の日記に、ニューヨーク州のスカボロー駅行きの列車のなかでサイモンと同賞の創設について話し合ったことを記している。

> 道中われわれは、きわめて重要なコンテストの計画を練った。もともと、成人教育運動を促進する良書に贈る賞を設けようではないか、という考えからはじまったコンテストだ。目下の提案は、知識の人間化の領域において傑出したノンフィクション書籍に贈られるサイモン・アンド・シュスター・ナショナル・アワードの創設である[21]。

シュスターがこのように記しているとおり、この賞の設立は第一次世界大戦後のアメリカにおける成人教育運動、すなわち成人のための教育を組織化する運動を多分に意識したものであったといえる[22]。

第一次世界大戦後のアメリカでは、カーネギー財団を中心に成人教育のための組織が立ち上がり、成人のための既存の教育が組織化されようとしていた。アメリカには19世紀前半の北西部・中西部を中心に展開された成人教育運動であるライシーアムや、19世紀末から20世紀初頭にかけてニューヨーク州ショトーカ湖畔で開かれた文化啓蒙運動であるショトーカ運動など、講演や講座を通じて幅広い年代の人々に学問的知識を提供する制度は存在していた。しかし「成人教育」（adult education）という概念が一般化したのは1920年代になってのことであった。1926年には全米初の成人教育のための組織であるアメリカ成人教育協会（The American Association for Adult Education, AAAE）が設立され、全米図書館協会（American Library Association, ALA）やアメリカ労働者教育協会（Worker's Education Bureau of America, WEB）とともに、それまで局地的に細々と進められてきた労働者教育や学校教育修了者向けの継続教育の体系化を進めるようになった。シュスターの日記には、シュスターとサイモンが賞の選考委員の顔ぶれや賞の趣旨について、カーネギー財団理事長のフレデリック・ポール・ケッペル（Frederick Paul Keppel）ら当時アメリカの成人教育運動で中心的役割を果たしていた者たちからも助言を仰いでいたことが記されている。成人教育運動関係者たちによる助言が同賞の設立にどこまで影響を及ぼしたかについては検討の余地があるものの、少なくともS&S社が同賞を通じて当時の成人教育運動と何らかの関わりを持とうと試みていたことは明らかだ。「フィクションよりも冒険的で刺激的」な、専門家でない一般読者を惹きつけるノンフィクションを求めるベーコン賞は、このようにS&S社の成人教育運動への意識の高まりを具体的に反映したものだったのである。

数百点の応募原稿のなかから第一回目の受賞作に選出されたのは、高校

の化学教師のバーナード・ジャッフェ（Bernard Jaffe）が化学者たちの生涯をまとめた “Crucibles: the Lives and Achievements of the Great Chemists” であった。ジャッフェはニューヨーク市立大学シティカレッジとコロンビア大学を優秀な成績で卒業後、4 年間の教員生活を経て化学史に関する資料を数年かけて収集し、化学者や化学の発達について執筆を続けてきた。選考委員の一人で一般読者向けの化学のノンフィクション *Creative Chemistry*（1919）の著者であるエドウィン・E・スロッソン（Edwin E. Slosson）は “Crucibles” を「鮮やかに描き出された伝記の形で語られる化学史であり、伝記は興味深い人物像に満ちている。さらに、自然科学についての必要な説明を、わずらわしい専門用語を極力使用せず巧みに組み込んでいる」と評する[23]。

その後、第二回ベーコン賞が開催されたという記録は残っておらず、同賞がシュスターらの意気込みも虚しく S&S 社の一回限りの広報活動にとどまってしまった可能性は否定できない。受賞者のジャッフェは S&S 社のこの一大キャンペーンにおける唯一の「収穫」となった。受賞作 “Crucibles” を書籍化してからも、同社から高校生向けの化学の概説書を出版し、「ベーコン賞受賞者」という肩書とともに *Forum* 誌での連載も行った。さらに 1938 年 5 月に開始した NBC ラジオのクイズ番組「インフォメーション、プリーズ！」（Information, Please!）に度々出演することで「大衆的な知識人」としてその名を知られるようになった。このように、「ベーコン賞」による S&S 社の「知識の人間化」の試みが結果的には一過性の限定的なものにとどまってしまったものの、同賞はロビンソンのいう「新たな書き手たち」を募るという点で彼の思想を具体化した企画のひとつだったのである。そして同時にそこには、S&S 社が出版社として同時代の成人教育運動に関与しようとするねらいが反映されていたのである。

3.　出版活動と「知識の人間化」：ロビンソンと新興出版社をつなぐ「編集」のアナロジー

「新歴史」の提唱者としての歴史家ロビンソンの思想は、革新主義時代の価値観に基づいていた。学問的知識は社会の進歩にとって有用であるべきで、そのためには知識が一部の研究者による細分化された研究のためだけでなく、日常生活のあらゆる行動や考え方、ひいては社会全体をより良いものにするためにこそ活用されるべきであるという見解は、革新主義時代の社会改良運動の発想と重なる。

そして「新歴史」を前提とした彼の「人間化」概念の意義は、既存の知識体系の再編集を促した点にある。ロビンソンの「人間化」とは、高度に専門化されたがゆえにごく一部の研究者の専有物となってしまった学問的知識を、再び社会全体の進歩に有用なものにすべく、一般大衆の手に戻そうとする試みであった。それを実現するために彼が求めたのは、細分化・複雑化した知識の蓄積のなかから「一般的な読者」たちに「必要」と思われる情報を選別し、理解しやすい形に再編集する「新しい書き手たち」である。そしてそれは「新たな編集者たち」と言い換えることもできる。編集は多分に恣意的な行為だ。誰にとってどのような情報が必要とみなされるのかは、情報を選別しまとめあげる編集者の価値判断にゆだねられている。ロビンソンは編集 (editing) という語こそ用いていないが、雑多な情報を取捨選択し、特定の物語を提供するという点で彼の「人間化」の概念はまさに編集作業のアナロジーなのである。

ロビンソンが示した「編集」のアナロジーは、シュスターとサイモンの出版に対する考え方と重なるものであった。今でこそ児童向けのファンタジーから自己啓発書まで幅広く手掛ける S&S 社だが、1924 年の創業からしばらくの間はノンフィクションを中心に出版していた。だがシュスターもサイモンも、ノンフィクション書籍の出版に特化しようとしていたわけではなく、出版する書籍のジャンルや分類にはこだわってはいなかった[24]。このような姿勢は、ベーコン賞について「優れたノンフィクションの出版

元として、サイモン・アンド・シュスター社に世間の注目を集める術となるかもしれない」と綴ったシュスターの記述と矛盾したものと映るかもしれないが、シュスターとサイモンにとって重要だったのは「何を出版するか」ということ以上に「どのような形で出版するか」だったのである。このように「作品をどのような形で読者に届けるか」を重視するシュスターとサイモンの考えは、シュスターによれば彼らの「編集上の出版哲学」(editorial publishing philosophy) の一部であった。

彼らの「編集上の出版哲学」は、シュスターのインタビューの中に具体的に示されている。シュスターとサイモンにはS&S社創業当初から、いわゆる「名作」と呼ばれるような文学作品をより多くの読者がより手頃な価格で入手できるようにしたいという考えがあった[25]。このような考えをもとにして企画されたシリーズのなかに、「インナー・サンクタム・ライブラリー」(The Inner Sanctum Library) がある。このシリーズが特徴としていたのは、「古典」「名作」といわれるような文学作品と、作品解説や批評などを一冊に収めているという点であった。シュスターはインタビューのなかで、このシリーズの一冊としてウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) のアンソロジーを手掛けたときのことを回想している。ホイットマンのアンソロジーが出版されたのは第二次世界大戦後だが、「インナー・サンクタム・ライブラリー」という企画それ自体は1920年代半ばにすでに構想されていた[26]。このアンソロジーには、ホイットマンの代表的な詩や散文のほかに、書簡や日記、批評家による論評なども合わせて収録されている。シュスターはこの試みについて「読者がこの作品の文学的な位置づけや歴史的な位置づけを理解するのにより効果的なものとなるような装置を付け加えた」と振り返っている[27]。それはまた「読書の愉しみ」と「教育」という二つの魅力を一冊の中に併せ持つものであり、この二つを一冊のなかで実現しようとしたホイットマンのアンソロジーはまさに同社の「編集上の出版哲学」を体現したものであったと評価している[28]。読者の「作品の文学的な位置づけや歴史的な位置づけ」への理解を促すために、作品それ

自体だけでなく書簡・日記・論評など作品の価値や作家の魅力を物語ってくれる「装置」を配置する。この点にシュスターとサイモンの「編集上の出版哲学」が表れているのだとすれば、彼らにとって「編集」は教育的なねらいと結びついていたといえるのである。

おわりに

「知識の人間化」をめぐるロビンソンの思想と S&S 社の出版活動のレトリックは、ともに出版と教育とを同一視しており、「複雑化した専門知識を非専門家の読者にとって平易で理解しやすいものへと解し、語りなおす」という「編集」のアナロジーによって繋がっている。それはある側面からみれば、知識を「持てる者」である一部のエリート層がその他大勢の「大衆」に一揃いの知識を押し付ける「上からの教育」に過ぎないともいえる。あるいは、非専門家の読者にとっての「読みやすさ」「理解しやすさ」を重視する書籍の存在は、必ずしもロビンソンが目指そうとした社会の進歩などという崇高でナイーヴな理想のみに基づくものではなく、顔の見えない「消費者」たちに迎合した出版社による商業主義の産物とみることもできるだろう。しかし、非専門家の一般読者にとって有益な書籍を生み出すにあたり「何を語るか」だけでなく（あるいはそれ以上に）「どのように語るか」を重視するロビンソンと S&S 社がともに抱いた「知識の人間化」の理想は、1920 年代アメリカの出版文化におけるひとつの知的な潮流だったのである。

注

1 James Steel Smith, “The Day of the Popularizers: The 1920’s,” *South Atlantic Quarterly*, 62（Spring 1963）: 297.

2 John Tebbel, *A History of Book Publishing in the United States: The Golden Age between Two Wars 1920–1940*.（New York: R. R. Bowker, 1978）, IV, 32–35.

3 Warren I. Susman, *Culture as History: The Transformation of American Society in the Twentieth Century*（New York: Pantheon, 1984）, 107; Joan Shelly Rubin, *The Making of Middlebrow Culture*（Chapel Hill: U of North Carolina Press, 1992）, 209–265;

Trish Travis, “Print and the Creation of Middlebrow Culture,” in Scott E. Casper, Joanne D. Chaison and Jeffrey D. Groves eds., *Perspectives on American Book History: Artifacts and Commentary* (Amherst: U of Massachusetts Press, 2002), 339–366.

4 Harold W. Stubblefield and Patrick Keane, *Adult Education in the American Experience: From the Colonial Period to the Present* (San Francisco: Jossey-Bass, 1988), 195–209.

5 James Harvey Robinson, *The New History: Essays Illustrating the Modern Historical Outlook* (New York: Macmillan, 1912), 1.

6 Ibid., 17.

7 Robinson, *The Humanizing of Knowledge* (New York: George H. Doran, 1923), 16.

8 Ibid., v–vi.

9 Ibid., 17–18.

10 Ibid., 90.

11 Ibid., 91.

12 Ibid., 101–105.

13 “Simon and Schuster Inc. Master Summary 1924–1933,” Box88, Max Lincoln Schuster Papers, Rare Book and Manuscript Library, Butler Library, Columbia University, New York, N. Y.

14 Schuster, “The Reminiscences of Max Lincoln Schuster,” Interview by Louis Starr and Neil Gold, 1956 and 1964. TS. Columbia University Oral History Collection, Butler Library, Columbia University, New York, N.Y., 63.

15 Ibid., 103

16 Ibid.

17 “Terms and Conditions of the Francis Bacon Award for the Humanizing of Knowledge,” Box 261, Max Lincoln Schuster Papers.

18 Schuster, diary, Oct. 22, 1926. TS. Max Lincoln Schuster Papers.

19 “Terms and Conditions of the Francis Bacon Award for the Humanizing of Knowledge.”

20 Ibid.

21 Schuster, diary, Oct. 22, 1926. TS. Max Lincoln Schuster Papers.

22 成人教育運動の定義については以下を参照した。志々田まなみ「1920 年代アメリカ成人教育運動への疑義――教育内容論の展開に着目して――」『広島経済大学研究論集』32（2009 年）、9.

23 “Bernard Jaffe, High School Teacher First Winner of the $7500 Francis Bacon Award for the Humanizing of Knowledge,” *Saturday Review of Literature*, June 7, 1930.

24 Schuster, “The Reminiscences of Max Lincoln Schuster,” 83

25 Ibid., 58. 同社の「名著をより身近なものに」という理念は、1939 年にシュスターとサイモンがロバート・ド・グラフ（Robert de Graff）らとともに始めた米国初

のペーパーバックシリーズ「ポケット・ブックス」によって本格的に実現されていく。

26 Rubin, 247.
27 Schuster, “The Reminiscences of Max Lincoln Schuster,” 122.
28 Ibid.